

「OPEN SITE（オープンサイト） 2017-2018」企画決定！

東京文化プログラム



全てのジャンルを対象に、新しい表現を創造し、社会へと開いていく意欲に満ちた企画が集まるプラットフォームを目指し、トーキョーワンダーサイト（TWS）が昨年度新しく立ち上げたプログラム「オープンサイト」。今年度の実施企画が決定しました！

今年の2月から4月かけて実施した公募では、国内外から昨年を上回る283企画が集まりました。あらゆる表現に挑戦する企画者の姿勢が重点的に検証され、書類審査と面接審査を経て展示部門4企画、パフォーマンス部門3企画を選出しました。さらにTWSが推奨する1企画を追加した合計8企画を2017年10月から2018年1月まで、2会期にわたり紹介します。ジャンルを超えた創造の場にご期待ください！

開催概要

実施期間： 第1期 2017年10月14日（土）～11月26日（日）
 第2期 2017年12月9日（土）～2018年1月28日（日）
 会場： トーキョーアーツアンドスペース本郷〔現TWS本郷〕（東京都文京区本郷2-4-16）
 休館日： 月曜日（ただし1月8日は開館）、年末年始（2017年12月29日～2018年1月3日）、
 2018年1月9日（火）
 主催： 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 育成支援課
 ウェブサイト： <http://www.tokyo-ws.org>

募集概要

募集期間： 2017年2月28日（火）～4月19日（水）
 応募総数： 283企画
 審査員： 遠藤水城（インディペンデント・キュレーター、HAPS エグゼクティブ・ディレクター）
 畠中実（NTT インターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員）
 三輪真弘（作曲家、メディアアーティスト、情報科学芸術大学院大学学長）
 近藤由紀（トーキョーワンダーサイト／東京都現代美術館 育成支援課長）

< お問い合わせ >

〒135-0016 東京都江東区東陽7-3-5 東京都現代美術館リニューアル準備室内 3F
 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 育成支援課 トーキョーワンダーサイト広報担当：市川、藤井
 TEL：03-5633-6373 FAX：03-5633-6374 E-mail：press@tokyo-ws.org

※トーキョーワンダーサイトは、平成29年4月1日より東京都現代美術館育成支援課として事業運営を行っています。

※トーキョーワンダーサイトは、平成29年10月1日より「トーキョーアーツアンドスペース」に名称を変更します。

実施企画

【展示】 展覧会会期中の開館時間内であればいつでも入場できます。予約不要、入場無料。

【パフォーマンス】 特定の公演日に上演、実施されます。要予約、有料（料金は各企画により異なります）。詳細は後日ウェブサイト、チラシにて発表します。

第1期 2017年10月14日（土）～11月26日（日）

【展示】		
企画者（国）	キム・ウジン（韓国） ビジュアルアーティスト	長谷川 新（日本） インディペンデント・キュレーター
企画名	「Brave New Exercise: Memorized Movements」	「不純物と免疫」
概要	アジア各地の体操を通じて、現代にもなお影響を残すアジアの近代化について考察する。	絵画、彫刻、写真、映像、インスタレーション作品を含めた現代美術の企画展示。 出展作家（予定）：大和田 俊、佐々木 健、谷中佑輔、仲本 拓史、百頭たけし、迎 英里子
【パフォーマンス】		
企画者（国）	reConvert project（スペイン） Roberto Maqueda と Víctor Barceló によるパフォーマンス・デュオ	Dr. Christian Dimpker（ドイツ） 作曲家
企画名	「reC_TECH」	「Grau-braun-weiße Ware」
概要	パーカッションとエレクトロニクスを用いて音楽の伝統から、新しい言語体系を探求するテクノライブ。	情報通信技術（灰色家電）と、家庭用電化製品（茶色家電）と家庭用大型家電（白色家電）によるパフォーマンス。

第2期 2017年12月9日（土）～2018年1月28日（日）

【展示】		
企画者（国）	黒田大祐（日本） アーティスト	IP Yuk-Yiu（香港） メディアアーティスト、キュレーター
企画名	「不在の彫刻史」	「PLAY.GROUND: video game art from Hong Kong」
概要	拾った石をそのまま木彫にした作品「石に就て」で知られる彫刻家・橋本平八を起点とした新しい彫刻史の仮想と、これに連なる黒田大祐の作品の展覧会。	現代文化の文脈と芸術的アプローチで、ビデオゲームを表現する香港のクリエイターたちによる展覧会。 出展作家（予定）：Ip Yuk-Yiu, Hui Wai-Keung, Edwin Lo, Alan Kwan
【パフォーマンス】		
企画者（国）	Galvanize and Fretwork Ensembles（イギリス） 様々なジャンルを融合させたエレクトロ・アンサンブル	Raewyn Hill & Naoko Yoshimoto（オーストラリア&日本） ※TWS 推奨企画
企画名	「Happenstance」	「Garden of Silence」
概要	中世のヴィオラ、エレキギター、ふいご式オルガン、ラズベリーパイ（シングルボードコンピューター）のサンプリングを融合させた即興と表記音楽のパフォーマンス。	ダンサーRaewyn Hill と 舞踏家・大野義人が、芸術家・吉本直子によるインスタレーション内で身体表現を追求するコラボレーション企画。

※各企画のタイトルは変更となる場合があります。予めご了承ください。

※パフォーマンスの日程、料金は後日発表します。

■ 審査員による講評

ジャンルを不問とした「企画」の公募である。便宜上「展示」と「パフォーマンス」に区分されているが、それはあくまで運営上の形態であって、ジャンルを示すものではない。一見すると「自由」なようだが、実際は極めて高度な要件が横たわっている。大概の「自由」はジャンルの範囲内においてのみ謳歌されている。なんでもやっつけていい、のは枠組みが設定されているからだ。その自由は、枠組みの外から見ると不自由さの表明であり、往々にして滑稽であったりもする。したがって、この公募ではレベルを一つ上げて、「ジャンルとは何か」、「展示とは」、「パフォーマンスとは」という反省性を導入する必要があるだろうし、その企画の必要性・必然性を丹念に「大きな言葉」で、つまり歴史性と社会性を備えた言葉で説明しなければならない。かようなことを考えながら審査をしていたが、その要件を満たす優れた企画に出会うことができた。私自身も大いに刺激された。これより後は、企画の実現に必要な「実践的な知」・「技術」を企画者が有しているかどうかが残されている（これだけが審査できないものでもある）。ともあれ、実現の日を楽しみに待ちたい。

遠藤水城（インディペンデント・キュレーター、HAPS エグゼクティブ・ディレクター）

今回は応募数が昨年よりも大幅に増し、自身の企画を発表する機会が現在いかに貴重であり、またそれが待望されているかが表れているように思った。実際、その応募されたさまざまな企画者とその企画案には、個人的であれ社会的であれ、作品や展覧会がどのように現代的な問題意識との関わりにおいて成立するべきかを考えさせるものも多く見られた。その中で、展示部門では、展覧会という表現形式と言ってもよい、制作および発表におけるキュレーションという意識を感じさせるものを推した。パフォーマンス部門では、ダンス、演劇、音楽といったジャンルの応募がある中で、コンサートという制度や現代音楽の現在性とは何かを考えさせるものにそうした意識が明確に表れていたように思う。ゆえに音楽よりの企画が多く選ばれることになった。両部門において、それが現在の展覧会やコンサートの発表のありようを批判的に照射するものになることを期待します。

畠中 実（NTT インターコミュニケーション・センター[ICC]主任学芸員）

第一回目ではそれほど意識していなかったのだが、「ジャンルの制限なし。TWS 本郷で実現可能な企画を募集！」というオープンサイトの価値を強く感じた審査会だった。作家の作品展示だけでなく、展覧会自体の企画、学術的研究と分かちがたいような「作品」など、今日の芸術／アートを真剣に考えるならばある意味では当然の、独創的で真摯な応募が多数寄せられた。また、パフォーマンス部門では結果として、正確に記譜された作品も含む、常識的には作曲コンクールに応募されてもおかしくない作品ばかりが選ばれた。それらの実演がとてもしみじみ一方で、もし、このような挑戦がオープンサイトでしか聴けないのだとしたら、同時代に生きる作曲家としてそれを喜ぶべきか、悲しむべきなのか、とても複雑な気持ちにもなった。

三輪眞弘（作曲家、メディアアーティスト、情報科学芸術大学院大学学長）

昨年からはまった「オープンサイト」の第二回目である今回、応募者数は昨年を上回り、海外からの応募は全体の六割を占めた。展覧会企画とパフォーマンス企画に分かれてはいるものの、「すべてのジャンルに創造の場を開く」ということは、多様なジャンルからの提案を同じ土台の上で審査することである。キュレーション企画とアーティストの展示計画、各ジャンルの特性に特化した実験的な試みと領域横断的な試み、完成が開かれた過程重視の企画と完成企画のプレゼンテーション。それぞれに異なる魅力と実施意義があり、力点が異なるそれぞれの企画に対し、その都度議論を重ねて選出した。それぞれの特性がどう発揮され、全体の企画を通じてその差異がどう見えるのかが気になっている。

近藤由紀（トーキョーワンダーサイト／東京都現代美術館 育成支援課長）